

学習会(子ども会)だより 6月号 後編
MY SKY 第5号
マイスカイ

1995年6月27日火曜日発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)



発行者
板野中学校
学習会
編集・文責:吉誠正士

①「つらいことあるねんな」(6月15日:1年第1回全体学習)

6月15日に1年生の学年全体学習のトップを切って、1年E組が全体学習を行いました。この全体学習を見ていた私は、本当にびっくりしました。というのは、今までの1年生と違って発言がすごく活発で、いきいきしていたからです。本当にうれしかったですね。各小学校3校の取り組みが、年々確かなものになってきているということが、目に見えてきたように思います(今までにも取り組んできたとは思いますが)。「この先1年生の全体学習はどうなっていくのだろう?」そういうワクワクする気持ちが、高まってきました。1年生の皆さん!あの頑張りを止めることなく、次の一步、次の一步と、より新しい学習を求めていく姿勢を忘れないでください!楽しみにしています!

次の文章は、その全体学習参会者の感想文です。

授業の中でも出てきた言葉ですが「心をひらいて」これが私たち半田中学校1年団の合い言葉です。道徳の時間、話し合いの度にこの言葉を心においています。心をひらくためには、ひらける仲間がいなければなりません。かなちゃんが心をひらけたのも、クラスの仲間がいたからこそだと思うのです。私たちは今、この仲間づくりに日々様々な角度からアプローチしています。

今日の板野中学校1年生の発表。こんな大勢の中での挙手は本当に勇気がいると 思います。でもその勇気こそが、この同和問題解決を実現する力だと思うのです。私のクラスでも、この勇気をみんなでもうとしています。本当に隣りにいる仲間の気持ちを分かろうとすること。自分を知ってもらおうとすること。そんな思いを私自身も常に自分に問いかけながら、子どもたちと接しています。今日、板野中1年生が、中学生になって2ヶ月でこれだけの勇気をもっていたこと、帰ってクラスの仲間に話します。そして、私たちもその勇気を育てていこうと思います。

ありがとうございました。また勉強しに来ます。

半田中学校



◎「今、峠を越えて」(6月22日:3年第2回全体学習)

そして6月22日には、学期に1回の全校全体学習が3年E組を中心にして行われました。しかも板野町同和教育研究会ということで、板野町内はもとより、県内外から約150名もの参会者を招き、共に学習することができました。

今回の学習で、多くの皆さん「あれっ? 今日はちょっと違うぞ? !」と感じたと思います。私もその一人でした。今までこの板中で何度も全体学習を見てきましたが、こんなに明るい雰囲気で学習できたのは初めてです。もともと考えてみれば、差別をなくしていく取り組みなんだから、心は明るくなっていくはずですよね。これからもこういう雰囲気で部落問題学習や全体学習をしていきたいですね。

ただ、人によって、自分の中にある差別意識をさらけ出することは、やはり苦しいことなのかもしれません。そういう人にすれば、ちょっと発表しにくかったのではないでしょうか。「それがその人の差別意識だ!」と言わればそれまでですが……。

まあ、とにかく、どんな人でも発言できる雰囲気をどうやって作っていくかですから、明るいだけでなく、「喜」もあり「怒」もあり「哀」もあり「樂」もあるような学習を、毎回・毎日・毎時間、みんなで作りあげていきましょう!

次にあげるのは、公開授業をした3Eのみなさんの感想です。

僕は、今回の全体学習をして、みんなの意見が聞けて、今までの中で一番満足できたように思います。午後2時30分に3Eの全体学習が始まり、僕の自分自身の闘いも始まりました。クラスの発表の状態が高まると共に、自分の中であせってきました。30分、40分と刻々と時間が過ぎていき、そして自分で闘いの決着がつき、発表をしました。本当は「今までのイメージを180度変えて、新しい気持ちの中で発表していきたい」と言いたかったのだけど、緊張していて変な口調になってしまって、笑いをとるかのように言ってしまって、後から後悔していました。

そして、6時間目の全体授業は、僕が今までに味わったことのないような明るい雰囲気でした。みんながいきいきしていたし、泣いている人が一人もいなかつたので、いつものイメージを破ったような時間でした。



今回は発表したものの、言いたいことが言えなかつたので、これからは自分の言い

たいことがはつきりと言えるようにしたいです。

3年E組男子

※

昨日の全体学習は、すごく良かったと思う。すごくみんなが続いて発表できていたからです。私も、2回か3回手を挙げようと思いました。みんなの気持ちを聞いているとそんな気になってきたけど、自分の意見にも自信を持てず、手を挙げる勇気もなかったからできませんでした。班の話し合いもできていたし、STとOGちゃんとかとも気持ちを言い合ってまとめていて、本当に発表しようと思っていた。けど、できんかった。

でも、昨日の学習はいつこもしんどくなかった。いつも教室とかでは、真面目にできてなかつた。隣りの人と話とかしていたのに、昨日は真剣に考えて、自分の気持ちもしっかりもてていた。本当に今日はいい日でした。3年間の中で一番良かった日です。いいクラスになれたと思います。

3Eのみんなは、私たちのことを信じて発表してくれているので、私も頑張って発表できるようになりたいです。それと、親とかにも自分の気持ちを話せるようにしたい。今の親の考えは間違っているので、その間違った考えを、自分の気持ちも混ぜて変えていきたいです。

3年E組女子

※

始まる前から人の多さに驚いていた。授業が始まつてみんながどんどん発表し始めた。みんなの意見の中に「学習会は暗いイメージがある」と言った。僕も今までそう思っていた。小学校の頃から道徳の授業は暗くするものだと思い込んでいたから、そこから「学習会も暗い」と思っていた。でも、野球部とかで友達が楽しそうにというか、みんな全然嫌がらずに学習会に行っているし、話とか聞いていてもすごく楽しそうだったので、そういうイメージはだんだんなくなっていた。学習会の仲間の絆はすごいと思う。そういう絆をクラスでもつくっていきたいと思った。それに道徳の時間とかもっと明るくしていったら、みんなが発表しやすいと思う。それはふざけるとかいうんじゃないなくて、自然に出てくる笑みで明るくすることだと思う。

僕は発表できなかった。みんなの意見につないでいけなかった。僕はまだクラスのみんなを信頼していなかったのかもしれない。こんなことでは仲間の絆なんてつくれないと思う。先生も言ってたけど、昨日の授業が最後でなく、通り道にすぎないのでから、これから頑張りたい。昨日のことをいかしていきたい。

3年E組男子

次には、参会者の感想を載せておきたいと思います。

3年E組の生徒たちと先生が一つにまとまっていて、とても雰囲気の良い、なごやかなクラスだと思いました。「今、峠を越えて」という課題を学習しながら、自分たちのクラスのことや、自分の気持ちを生徒が発表して、本音が言える学習ができているなと思いました。この全体学習の場にいる板野中学の生徒の皆さんのかつぱついきんの活発な意見を聞いて、私たちが思ってたよりずっと、本音で自己的ことを語っていたように思います。その前向きな姿勢がとても印象的でした。置かれている環境の中で、こんなにも明るく語り合っている現実を見ていると、同和問題学習は「本音学習」で、そして人の意見や自らの生活を省みるいいチャンスを与えてくれるんだということがよく分かり、嬉しく思いました。

自分の意識が改革できるように“人の差別意識”に見え隠れする、誰もがもつ自身の意識を素直に認め、明るく取り組んでいける親になれるよう、真剣に取り組んでいきたいと思います。



※

ここで勇気を出して自分の意見を発表することが、自分の峠であるという、ある生徒の発言を聞いて、自分が恥ずかしくなりました。何も言えないで、ただ聞いているだけの自分がここにいたからです。先生は差別はアカンと教えてくれたけど、先生も結婚問題になると苦しいものをもっているというある男子の意見……。教師の中にまだ残る差別意識を突き詰められた感じがした。

ふざけたように照れながらも、それは必死に場を明るくしようとする、彼女らの思いが伝わってきたことも凄い感動であった。義理の拍手、2時間続きの全体学習提案など、鋭い感性の中から生まれてきた前向きな意見。子どもたちがこんなにも本音で語り合える場がもてていることに、驚きと感動と自分への反省がありました。

「発表して自分が変わることが嬉しい」「同和問題学習が好きだ」と言える生徒を育てていきたいし、また自分もそう思える教師になれるよう、勉強していくたいと思います。ありがとうございました。

研修センター

※

被差別部落を有する地区的幼稚園から参加させていただきました。幼児(4・5才児)

期、少年期を経て、中学生になると、本日の生徒のように成長を遂げるという姿を拝見し、とても感動すると共に、新鮮な思いで参加させていただきました。

昨年、被差別部落の幼児2名が学級に在籍していましたが、認識不足のため、いろいろな場面で立ち止まらねばならないときがありました。講師先生が子どもの背景を知ることの大切さを話されたことには、つくづく反省させられました。

教師自身に立ち返っていく問題。今後も前向きで取り組んでいきたいと思います。
ありがとうございました。

しまね まつえ
島根県松江市



◎8年に1度の郡部落問題意見発表会会場！（6月23日：板野郡部落問題意見発表会）

また、引き続いて6月23日には、板野郡内の中学校から21名を招き、板野郡部落問題意見発表会と同和かるた取り大会が本校で行われました。

本校からも3年A組中川直美さん、2年B組秦大輔くん、2年A組三浦奈美さんが代表として参加しました。みんな堂々と全力を尽くして頑張っていました。やはり一生懸命頑張っている姿って、美しいですね。

一生懸命といえば、審査結果集計中に行われた郡内初の試みのパネルディスカッションも、人権部の皆さんのがんばりにより、大変活発で有意義なものとなりましたね。他校の皆さんもびっくりしていたそうですよ。私たちにとって「当たり前」のことでも、他校の人には「当たり前」ではないんですね。特に前で司会をしていたお二人さん、ごくろうさまでした。中学生といえども、それだけのことができる能力を持っているんですね。ひとつすると全体授業も、生徒の皆さんの司会・進行でできてしまえるのかもしれませんよ。そうすれば、全体学習もまた一步前進ですね！

自分たちの、自分たちによる、自分たちのための学習。本当に素晴らしいですね！



◎民主主義 平等を求めて① おばあさんは同和対策を拒んだ（朝日新聞より）

先日、ある先生から朝日新聞に載っていた記事を紹介されました。もうすでに読んだ人もいると思いますが、より多くの人に読んでもらいたいと思いましたので、次にその記事を一部編集して掲載します。

「おばあさん、思い切って町長に会おう。一回だけでええ、差別されてずうっと苦しかったこといおうや。人間なんじやけ、な」

竹内一夫さん(59)は、腰が曲がったおばあさん（当時80歳）の手を包んで語りかけた。しかし、答えはやはり変わらなかった。

「もう先も短いけ、ええわ。悪いところに生まれて、悪いところに来たんじやけ仕方ないんじや……」

今なお残る、この被差別部落。
周辺から孤立した数世帯が肩を寄せあつてきた。若者が次々に去り、年寄りは亡くなり、おばあさんはひとりぼっちになった。軒の低い家は山すその草に半ば埋まっている。

おばあさんのつえがわりは手押し車だった。時々、斜面のけもの道のような細道をたどり、車の通る道に出て、村の店で日用を足していた。〈先が短いなら、人間としての声を急いで上げにやあ。あきらめちゃあいけん。〉竹内さんは心の中で叫んでいた。それが、二年前の夏だった……。

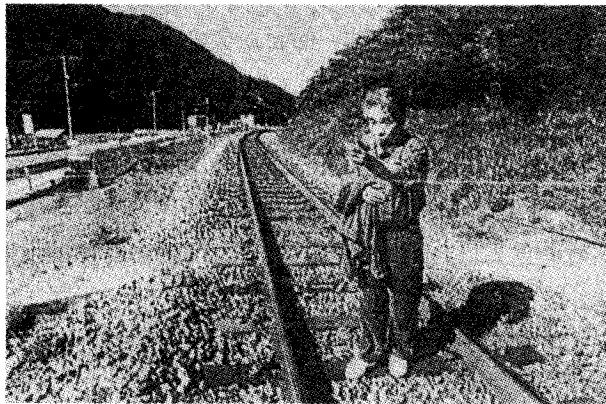
そこへは最初、行商人のふりをして暗くなつてから訪ねた。どこが入り口かわからない家だった。

次は「のどが乾いた」といって立ち寄り、田畠の出来具合などを話題に話し込み、おばあさんには農地がないのを知った。

農村の被差別部落の人々は、戦前から田畠を持てず、小作すらできなかつたせいで戦後の農地改革の際も、自作農になる機会を逃した。竹、木細工、行商、出稼ぎ、日雇いなどでかろうじて食いつなぐ貧しく不安定な暮らしを余儀なくされてきた。

おばあさんは「差別はない」といった。が、次第に心を開き、悔しく、悲しい思い出を話し始めた。

村人同士が葬儀を手伝い合う「死講立ち会い」のならわしも、夫の葬儀は知らん顔だった。村人の弔問に出かけた時には、庭までは入れたが、座敷には上げてくれなかつた。



山際の被差別部落と道路の間に大正年間、鉄道が通つた。以来、今日まで踏切がつけられないまま。「ここは危険でいいというのか」と竹内一夫さん(島根・山口県境付近で)

二人の息子には、田畠も勤め先もなく、地元では結婚もできなかった。だから、三十年以上も前に都会に出たきり、帰らない。

おばあさんは「それでええ。息子の家族に、こんな暮らしを知られるのは死ぬよりつらい。息子もそうじゃろう。さみしいけど仕方ない」と言った。

おばあさんの願いは、何とか夫の三十七回忌を済ませることだった。それが果たせたら、老人ホームに行きたい、と言っていた。「そこなら毎日、だれかが声をかけてくれ、手も握ってくれるじゃろし……」しかし同和対策だけは拒み通した。対策を受けると周囲の目が険悪になるのが怖かったからだ。

竹内さんはうめくようにいう。「審議会答申から三十年。おばあさんには民主主義も、なんも届かんかった」

朝日新聞1995年6月16日付

今もなお、部落差別は生き続けています。中には「目に見えるような差別はなくなった」という人もいます。しかしこのおばあさんのような部落は、全国にいまだ存在するのです。確かに私たちの周りには見えにくくなっているのかもしれません。だからといって、同じ部落差別を受けてきた全国にいる私たちの仲間を放っておいてよいものでしょうか?このおばあさんのような生き方が本当に人間として輝いた生き方なのでしょうか?家を出て行った子どもたちが本当に故郷を懐かしみ、堂々と我が故郷を名のれる社会にしていかなければならぬのではないでしょうか?

かつて丸岡忠雄さんが

「 翼郷に ひとり ふるさとを 吞む 」

と詠っています。みんなが、そういう思いをしない社会を待ち望んでいるのではないでしょか!そのためには、全ての人々が互いを認め合いながら、励まし合い、共に手を取って前進していかなければならないのだと思います。

今ある法律は、2年後にはもうなくなってしまいます。法律を別の形で残そうと頑張って活動している人も多くいます。その人々に連帯しながら、私たちも「今、自分にできること」を常に自分に問う毎日を過ごさねばならないのだと思います。

この記事に興味のある人は、ぜひとも読んでみてください。もし家で朝日新聞を取っていないのなら学校にありますので、読んでみてください。



⑩「人間に光あれ」(7月5日:2年第2回全体学習)

今、2年生が7月5日の全体学習（四国地区同和教育研究大会前日全体学習）に向けて「人間に光あれ」という資料を使って、水平社創立大会の頃のことについて勉強をしています。皆さんも知っている、あの西光万吉が書きつらねた水平社宣言が読まれた大会です。その資料の一部を少し抜粋したいと思います。

京都の冬は、すごく冷えこんで寒いものです。その冬の二月の、あるうすら日のさす午後のことでした。『すみや』の物干台は、うまいぐあいに高い壁や屋根が風よけになっていて、静かで、ひなたぼっこにもってこいの場所でした。青いナッパ服でやせた体をつつんだ西光は、今日もそこへのぼってきて、すわりこみました。しばらくじつと考えこんでいましたが、やがて小さな手帳をポケットからとりだして、鉛筆をなめなめ、こまかい字を書きつらねていきました。それは「全国に散在するわが特殊部落民よ、団結せよ」ということばではじまる、あの有名な『水平社宣言』の草稿だったのです。西光は、警察の目をくらまして宣言などの大事な文書を書くために『すみや』の物干台をえらんだのでした。やがて夕方、西光は、そこをおりていきましたが、再び彼は、その物干台にくることはありませんでした。

いよいよ三月が近づいていましたから、職をすべて創立大会の準備に全力をかたむけはじめたのです。

ついに三月三日がせまってきました。京都駅前の宮本旅館では、阪本や西光のほかに各地から集まった青年たちが、大会の準備にいそがしく働いていました。そこへ政府の役人がやってきたのです。

「部落対策の予算を二百万円だすから、水平社をつくることをやめてくれ」と、役人は言うのです。阪本らは、それをきっぱりことわり、「われわれが運動をおこしてもおこさなくとも、どんどん部落をよくする金を出せばいいのです」と答えました。

一九二二（大正十一）年三月三日、部落を部落の人間みずから之力で解放しようと、歴史的な全国水平社創立大会の日がきました。

まだ春の浅い当日、午前九時には激しくふった夜来の雨も晴れました。朝から京都駅に列車が到着するたびに数十人、あるいは数百人からの団体の人々が次々におりてきました。あつしやハンテン姿のみすぼらしい人たちばかりで、なかには消防服

の人や，在郷軍人らしい軍服姿の人もまじっていました。この人たちは，京都の岡崎公会堂でひらかれる創立大会に参加する人たちでした。

人々は赤や白の布に「解放か然らずんば死を与えよ」などと書いたのぼりをかかげ長い列をつくって会場へ進みました。

会場の入り口には，

三百万人の絶対解放
特殊部落民の大同団結

全国水平社創立大会午後一時より

と書いた大きな紙がはられてあって，これらの人々を迎えました。会場の内は，紅白のまん幕がはられ『解放』『自由』『団結』などという文字をそめた旗が数しえず立っています。しかもそれより驚いたことは，広い会場には，すでにぎっしりと人々がつまっていることでした。人々は，これまで身をぢぢめるようにくらしてきましたから，「こんなにも，たくさんの兄弟がいるのだ」と胸の中は喜びと，通い合う共感とで熱くなりました。すでに会場の中は，開会まえから，強い興奮した空気のみちみちていたのです。当時の記録によりますと，この大会に参加した人の数は，ほぼ三千人と言われます。

午後一時，会場に激しい拍手がひびきわたり，開会がつけられました。

阪本清一郎は創立までの経過を報告し，綱領，宣言，決議などを採択し，各地方の代表が次々に立って，長い間いためられ続けてきた気持ちをぶちまけました。西光万吉の書いた『水平社宣言』は，「長い間いじめられてきた兄弟よ」と呼びかけ「犠牲者がその烙印を投げかえすときがきたのだ」「われわれがエタであることを誇りうるときがきたのだ」と宣言し，「人の世に熱あれ，人間に光あれ」とむすんでいます。三千の人々は，声なく顔をふしてそれに聞きいっていましたが，やがて，あちこちですり泣きが聞こえました。感激とこれまでの数々の苦しい経験を思い出してたらなくなつたのです。宣言を読み終わった駒井喜作は，大きな身体をしていましたが，彼も壇をおりのを忘れ，そこに立ちつくしていました。静まりかえった会場には，すり泣きが流れましたが，やがてそれは割れんばかりの拍手にかわっていました。

皆さん，今年が西光万吉生誕100周年だということを知っていましたか？その記念すべ

き年に、もう一度、水平社宣言の持つ意味をしっかりと確認しておこうではありませんか。

西光万吉生誕の地である奈良県連からも次のような呼びかけがありました。

今年は故西光万吉生誕 100周年の記念すべき節目の年。「全国水平社の精神に立ち戻って世界の水平運動を誓いあう」という意味で、奈良県連は、七月一日に追悼集会をする。全国の仲間にも、ぜひ参加をお願いしたい。本年度を意義づける特徴に西光万吉生誕 100周年をいれてほしい。

都道府県で「水平社宣言」を朗読される機会があれば、そのおりに、西光万吉生誕 100周年をぜひ一言もりこんでほしい。

この力 強い運動を、私たちはしっかりと心にたたき込んでおかないといけないと思います。「部落問題学習＝暗い」という意識が、もし皆さんの中にあるのなら、まずそれから変えていかねばなりません。確かに差別を受けてきた事実そのものは、暗いことなのかもしれません。先のおばあさんの思いを考えると、どうしても顔をうつむけてしまうかもしれません。しかしそれと同時に、皆さん自身、心の中の深い奥底から、激流にも似た、激しい怒りや 憤りが渦を巻いて吹き出してきたのではないでしょうか。

どうして? どうしてそこまでされて!

と感じたのではないかと思います。その怒りと、この力強い運動が結ばれて、はじめて新しい未来が見えてくるのだと思います。そしてその中で、本当の人間関係や、美しさを求めて生きる生き方ができていくんだと思います。つまり自分自身を磨いていく生き方ができるんですね。それのどこが、「暗い」んでしょうね。おかしな話ですね。今まで、明るく未来を見つめる力強い学習が少なかったから、そういう意識になっていったのかもしれませんね。ということは、今までの学習のあり方も考え方を直さなければいけませんね。

ひとよおつにんげんひかり
人の世に熱あれ、人間に光あれ!

※「人間に光あれ」の資料に興味のある人は、2年の先生か同和教育担当の先生まで!



◇ ◇ これから日程 ◇ ◇

これから予定は、次のようにになっています。暑さに負けず頑張りましょう!!

★7月3日(月) 東・西校区学習会保護者会

★7月5日(水) 2年E組2年全体学習(四国地区同和教育研究大会前日全体学習)

☆7月6日(木)~10日(月) 1学期末テスト

★7月10日(月) 南校区学習会保護者会(南公会堂)

☆7月20日(木) 終業式

★7月21日(金) 徳島県部落解放高校生奨学生集会

(徳島市:郷土文化会館)

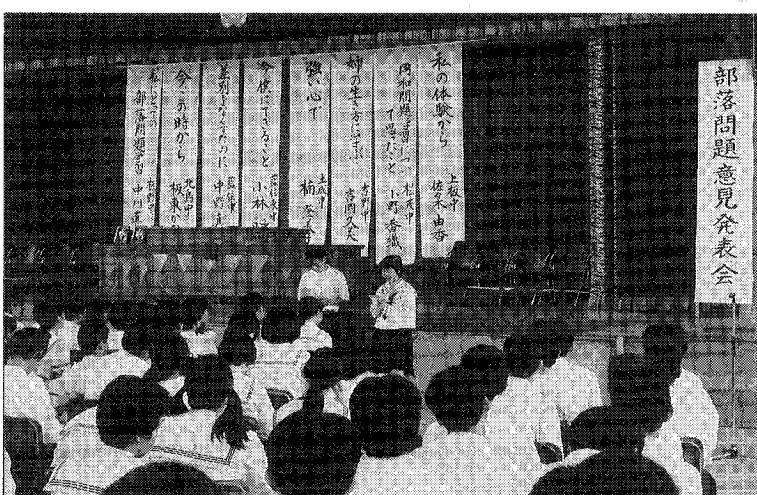
★8月3日(月)~5日(土) 全国部落解放高校生奨学生集会(高知県)

★8月8日(火)・9日(水) 学習会一泊研修(相生町:アイアイランド)

今回は行事が自白押しだったので、「部落の起こりとその歴史」はお休みいたします。



3年第2回全体学習(6月22日)



板野郡部落問題意見発表会(6月23日:本校)